

保育領域に於ける学習内容の実態と変遷

武田京子*・米内美恵子**

(1991年6月19日受理)

1. はじめに

学習指導要領の改訂にともない、家庭科の学習内容、履修方法等が大巾に変わることになった。家庭科の保育領域は「人間」について学ぶ数少ない機会を提供する重要な領域といわれながら、実際には他の領域に比べると軽視され、時間数は少なく、内容は抽象的で魅力に欠けるものになりがちである。生徒をとりまく社会環境、とりわけ家族にかかわることがらは、大きく変化してきている。新指導要領には、「家庭生活」という領域が新設され、社会環境の変化への適応の一方策と考えられるが、保育領域の内容はどのように変革をしたらよいのだろうか。

そこで、中学校の学習内容の実態と歴史的な変遷の様子を手がかりとして、従来の保育領域の学習を見直し、時代に合った、生徒が興味・関心をもって学ぶことのできる保育領域の学習を見出したい。実態に関しては、中学生、家庭科担当教員、家庭科を学習した経験のある大学生を対象とした調査を行った。保育教育の歴史的な変遷は、教科書、指導要領を基礎資料として考察した。

2. 学習の実態

(1) 中学生の実態

(授業前の調査から) 盛岡市立上田中学校3年生(男子63名、女子55名、計118名)を対象に行われた、授業前調査¹⁾(平成元年・5月実施)をもとに実態を明らかにした。「核家族化の進行、出生児数の減少によって、成長の過程で弟や妹、甥や姪が育つ様子を見る機会が少なくなり、子どもの生活時間が変化し、家庭外でも近所の異年齢の子どもたちと親しく接する機会が少なくなっている。」という一般的な状況は同様である。

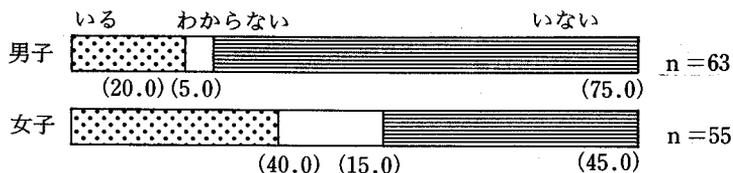
図1は、幼児の存在、接触の機会、関心、幼児と遊ぶ自信についての調査結果である。全項目とも男子の肯定的回答が低い。男子の幼児と常に接している者は、弟や妹のいる生徒である。弟や妹のいる生徒は男女とも幼児に対する関心や興味があり、自信をもって幼児と接している。幼児と接した経験の有無が関心、接する自信につながると考えられる。日常生活の場で幼児と接する機会の少ない生徒たちに、講義形式で行う知識の伝達では、果たして「幼児の遊び、被服や食

* 岩手大学教育学部

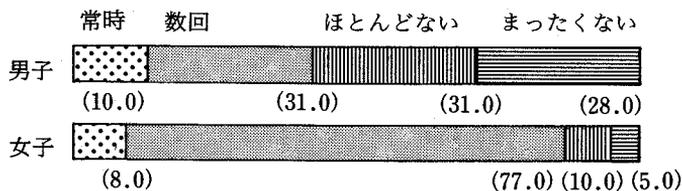
** 久慈市立 大川目小学校

図1 生徒の実態

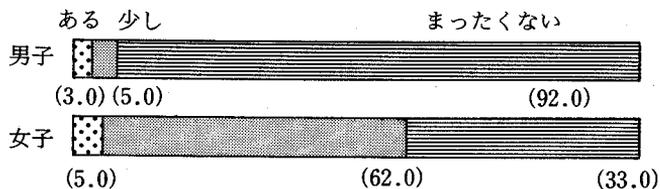
①幼児の存在 (あなたの身近に幼児がいますか?)



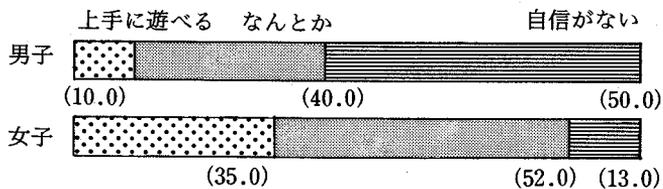
②接触経験 (幼児と遊んだことがありますか?)



③幼児への関心



④幼児に対する自信 (幼児と上手に遊ぶことができますか?)



()内は%

物に関する学習を通して、その心身の発達に応じた生活について理解させ、幼児に対する関心を高める」という目標を達成できるのかどうか疑問である。

(授業の実際) 上田中学校では以下の内容、時間計画で男女共修の保育の授業を行っている。

- | | |
|---------------|-----|
| 1. 幼児を知ろう | 1時間 |
| 2. 幼児の心と身体の発達 | 3時間 |

3. 幼児の遊び	8 時間
4. 幼児の衣服	1 時間
5. 幼児の食物	5 時間
6. 保育と環境	2 時間
	計20時間

(指導上の留意点)

- ①身近にいる幼児, または, 自分自身の幼児期を振り返ることにより, 幼児に対して興味を持たせたい。
- ②1人1人の創意工夫を生かしたおもちゃの製作を, 学習した知識を生かして幼児に合ったものにさせたい。
- ③おやつの実習などでは, 男女の協力も自然に行えるようにさせたい。
- ④保育の学習を通して, 自分を育ててくれた家族の愛情についても気づかせたい。²⁾

実際の授業「おやつ作り」では、「幼児の」と強調したにもかかわらず、幼児のおやつに適さない、自分達の好みのものを作ろうとし、単なる調理実習に終わった。「保育と環境」では、VTR や OHP など視聴覚教材を使用するときには関心を示すが、理論の講義には興味を示すことは少なかった。「環境が自分達を守り、育ててくれた」「幼児は周囲で守っていかなければならない。」という内容は、常識として理解しているが、実際に応用できるかどうかは疑問である。知識を伝達することはできても生徒の今後の生活に影響を与えることは難しいと考えられる。

(授業後の調査から) 盛岡市上田中学校3年生(男子65名, 女子60名, 計125名)を対象として質問紙によって調査した。(平成元年, 11月実施)

1) もう一度保育を学びたいと考えますか。

保育領域に対する生徒の学習意欲の度合を知るために、新指導要領の11領域から学習したい領域を3つ選択させた。女子の場合は食物、被服に次いで3位であった。男子の場合は全領域の8位、家庭系列では食物、家庭生活に次いで3位であった。保育領域は、「もう一度学習したい」という気持ちを起こすことの少ない領域である。

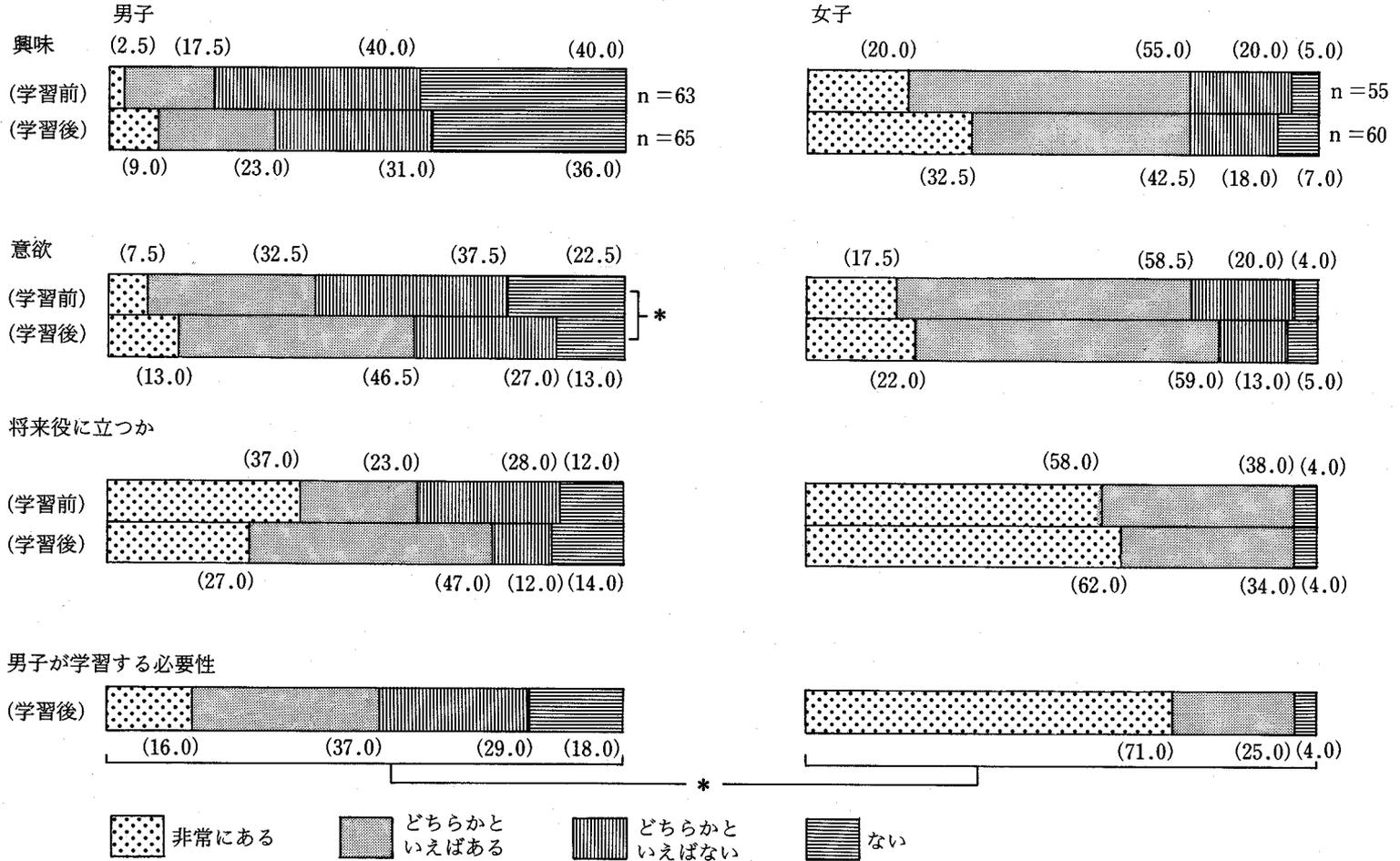
2) 保育学習に対する興味と意欲

授業前の調査では、「保育の学習に興味がありますか」という問いに、肯定的な回答をしたのは、男子の20%、女子の80%だった。また、「保育学習に進んで取り組みますか」には、男子の40%、女子の80%が肯定的であった。授業前には、男女間に興味、関心の差があった。授業後には、男子30%、女子の80%の生徒が興味を示し、男子の60%、女子の80%が関心を示した。授業を受けたことによって男子の興味、関心の度合いが増した。

3) 保育学習の必要性

「保育を学習することは、将来の生活に役立つと思いますか。」という問いには、男女とも授業前、後ともに高い割合で肯定的回答をしている。女子は、前後とも「役に立たない」という回答はなかった。「保育を男子が学習する必要があるか」については、男子50%、女子95%の肯定的回答が得られた。男子は「将来、役に立つとは思いつつも学習する気持ちになれない。」のが本音である。女子の70%は、男子の保育学習を強く希望している。

図2 学習前と学習後の意識の変化



* 5%水準で有意差あり

4) 学習後の感想

保育の学習が終って、「興味が持てた」「理解ができた」「よい経験をした」「おもしろかった」「かわいいと思った」という肯定的な評価をしたのは、男子の60%、女子の81.4%である。これに対して、「関心がなかった」「つまらない」「ピンとこない」という否定的な評価は、男子の35.8%、女子の9.7%である。更に詳しい学習を望むものは、男子の4.2%、女子の8.8%である。授業前調査では、「男子が保育を学習する必要性」を約5割の男子が否定していたが、授業を受けてみれば、「おもしろい」と感ずる生徒がおり、指導内容、方法に工夫をすれば、興味・関心を高めることは可能である。

5) 指導内容に対する興味

授業前調査では複数選択を許し、授業後は限定して、保育領域の内容で興味を持ったものを回答させた。前後ともに、おやつ作り、おもちゃ作りの具体的な製作実習の人気の高い。これは、指導要領の掲げている目標……遊び道具の製作、間食の調理、簡単な被服の製作など、生徒の発達段階に応じた具体的な学習を通して、幼児に対する理解や関心が更に深められるようにする³⁾。……に一見、合致しているように見える。しかし、前述の授業中の生徒の反応をみる限り、おやつ作り、おもちゃ作りは、生徒自身が楽しただけで終わる活動にとどまり、活動を通して幼児理解が深まったとは考えられない。

保育学習の仕上げに、2時間だけであるが保育園での実習を10年間以上行っている中学校がある。

理屈の通じない幼児と向き合ってその心を懸命におしはかり、どうしたら受け入れてもらえるだろうかと考える。また、幼児から親愛の情をストレートに示されて感激し、かわいいと感じる。こういう原体験、人間の基本的な関係は、きょうだいが少なく幼児と身近に接する機会もない今日では、意図的にどこかで経験させなくてはならないと思います。実際、時間は短くとも、この実習体験が多感な中学生に与えるインパクトは相当に強いものがあります。(校長の評価)

園児にとっても、年の離れた兄姉にあたる彼ら、特に男子生徒とのふれあいは貴重で楽しい経験だ。(受け入れ保育園の評価)⁴⁾

現行の製作実習は、頭の中だけの幼児理解にとどまり、完成後に幼児に与える活動が加わるとしても一方的なものになってしまう。保育園で実際に幼児と接し、次に何が起きるかを常に考えながらする実習とは根本的に違うものである。

「もし、もう一度保育を学習するなら、次のどの内容を学習してみたいですか。」今回の学習内容の他に、教科書にない内容を含めて問うた。男女とも授業で行った製作活動が高く、女子には幼稚園・保育園の見学がやや高かった。生徒は与えられた領域を素直に学習するが、自ら新しい領域に挑むという意欲に欠ける。指導目標に適した内容選択が重要である。

(2) 教師の保育学習に関する意識

岩手県内の中学校家庭科教師に対して保育領域のあり方について調査を行った。(平成元年7月実施、質問紙法) サンプル数が12と少ない(回収率48%)ので参考資料として保育に対する意識を考察する。

保育を教えた経験は3分の2にあり、教えていない者の理由は保育を教える意志がないからではなかった。保育を積極的に教えようとする教師は、幼児の範囲を越え、人間のあり方を教えようとする姿勢がある。家庭科を「人間を扱う数少ない教科」と考え、保育の授業をきっかけに、人間の内面のあり方に着目し、授業の基盤にしたいと考えている。

内容は教科書を中心に、社会の現状・問題点をとりあげる形式が多い。生徒に関心を持たせるための工夫として視聴覚教材を使う、実際に幼児を観察したり、接する機械を作る、等がされている。授業をする上での問題点として、「身近に幼児がいないために授業が表面的になる」「(高校)受験直前のため時間や精神的に余裕がない」があげられている。

核家族化、小家族化が進み、弟や妹のいる生徒は少なく、地域とのかかわりあいも希薄になってきていることが、教える側の難しさにつながっている。

新指導要領が施行されるようになったとき、「必修4領域の他に何を教えたいか。」順位法で3つ選択させた。集計の結果は、被服、保育、住居、情報基礎、栽培、機械の順となった。金属加工を選択した者はいない。保育を選択した理由は、「人間が生きていくのに必要」「家庭生活で重要」「生徒の将来に役立つ」「家庭科教科で重要な位置にあるから」の順になった。生徒の現在の生活にすぐ活用させようと考えている者はなく、今後の生きていくための基礎づくり、参考になると考えている。

保育の学習を通して生徒に考えさせたいことは、幼児の発達、特性等の教科書の内容ではない。幼児を学習することで生徒自身の自己理解、人間理解をさせるとともに、人への思いやりや感謝の気持ちに気づかせ、今後の生き方を考える契機にしたいと考えている。

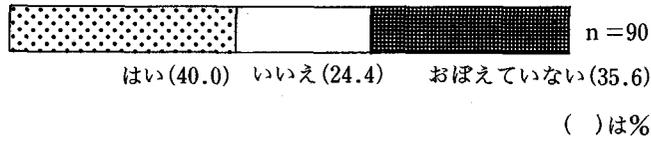
表1 教師が教えたい技術・家庭科の領域

	1位	2位	3位	合計
金属加工	0	0	0	0
機 械	0	0	1	1
栽 培	1	0	0	1
情報基礎	1	1	1	3
被 服	7	2	1	10
住 居	0	3	5	8
保 育	3	6	3	12

(3) 大学生に対する調査

岩手大学教育学部家政科所属学生を対象として、中学校に於ける保育学習についての調査を行った。(平成元年及び3年実施、対象学生計90名)学習経験有り40%、なし24.4%。記憶がない35.6%もあり、保育学習の印象は低い。学習した内容は、おもちゃ作り、発達過程、保育園実習、衣服、おやつ作りが上位を占めているが、妊娠・出産の過程、母子手帳を持って来て生育史を振り返る、教師の育児体験談を聞く、というのもあり、多種多様である。これに対する感想も「びっくりした」「感動的」から「ピンとこない」「一般論を聞いても子どもはひとりひとり違うだろう」

図3 保育領域の学習経験



まで様々である。

「もう一度家庭科を学習するとしたら、どの領域を学びたいか」を教師の場合と同様に、必修以外の領域を順位をつけて選択させた。結果は、被服、保育、情報基礎、栽培、住居、機械、金属加工の順となった。保育を選択した理由は、「将来役に立つから」が一番多く、41名(45.5%)である。中学生当時の感想では、「将来に役立つ」「興味をもてた」という学習の成果が感じられる評価をしたのは20名(22.2%)であり、現在の考えとは大きな差がある。現在の自分にとって「将来役立つ」と考えるのか、「学習の内容や方法を改善して、中学生の将来に役立つものにする」と考えているのか今回の調査では不明である。また、保育を選択しなかったのは、16名(17.7%)で、「他に重要なものがある」「子どもがきらい」「他の場で学ぶことができる」をあげている。「将来必要だから学習するべきだ」「いずれ必要になるのだから、今は他のことを学習すべきだ。」保育を選択する、しない、どちらの理由にも「保育は必要」の言葉が含まれている。人間として生きて行く過程で、保育を含めた人間の一生に関する知識、技術の学習は必要、という共通の認識が存在していることがわかる。しかし、学習時期に問題はないか等の、今後の見直しが必要である。

表2 学習したいと考えている技術・家庭科の領域 (大学生)

	1位	2位	3位	合計
金属加工	0	1 (11.2)	2 (22.5)	3 (11.1)
機 械	1 (1.2)	3 (3.4)	3 (3.4)	7 (2.6)
栽 培	18 (20.2)	8 (9.0)	12 (13.5)	38 (14.2)
情報基礎	27 (30.3)	6 (6.7)	7 (7.9)	40 (15.0)
被 服	26 (29.2)	26 (29.2)	8 (9.0)	60 (22.5)
住 居	8 (9.0)	19 (21.3)	20 (22.5)	47 (17.6)
保 育	9 (11.2)	26 (29.2)	37 (41.6)	72 (27.2)

()は%

3. 保育領域の学習内容の変遷

(1) 学習指導要領以前

明治以前の裁縫教育を除いた家政教育の中心は家庭にあり、家の伝統や習慣を守るために母や祖母、あるいは婚家で教育を受けた。儒教的家族観に支えられた封建社会の伝統に従い、婦徳の

涵養を第一に、あくまでも婚家の家風に順応することを目標として教育された。

明治維新後、それまでの家庭を中心とした女子教育方針は画期的に変革され、全国各地に女学校が創設された。「普通科偏重型」「家庭科尊重型」「両科併合型」の三種に大別することができる。この場合の家庭科は、「手芸（裁縫、編物、袋物の女の手業の一切を含めたもの）」中心であり、「読物」「口授」「教育学」という教科で育児教科書を扱った。女子教育と同様に家庭科教育も試行錯誤の時代であった。教科書は、江戸時代に用いられた「女訓物」ではなく、『家政要旨』、『小児養育談』、『保嬰新書』、『母親の心得』、『子供教草』、『智巴士氏育児小言』など欧米諸国の翻訳書である。翻訳にあたって、原書が詳訳されたものは少なく、日本の事情に適合するように抄訳されたり、意図的に削除された様子がみられる。⁵⁾育児教科書には、妊娠中と産後の母体の保健、幼い子どもの養育が書かれ、直ちに育児に活用できる知識を得るのに有効であった。

明治末期から大正期には自然科学の発達にともない、家庭科は「理科家事」として復活し、大正8年理科から独立し、大正15年に必須科となった。

国定理科家事教科書（大正3年）

嬰兒の取扱、哺乳、嬰兒の飲食物、小児の衣類、小児の疾病、小児の躰け方（23課中6）

国家家事教科書（大正8年）

哺乳、乳児の衛生、離乳、幼児の食物と病氣（35課中4）

大正8年、小学校令が改正され、裁縫と家事が分離された。施行規則第15条……家事ハ衣・食・住・看病・育児・其ノ他一家ノ経済ニ関スル事項ノ大要ヲ授クベシ……に示されるように育児は家事の中に位置づけられたが占める比重は少ない。女子は高等小学校卒業後は家庭に入るのが普通であったので、すぐ必要とされる料理に重点が置かれた。育児は母となるための準備教育であったが、夫の両親の家に嫁に入る、という当時の家庭観の下では、一般的な育児知識のみであっても姑から実際の教えを受けられる状況であったので、何も不都合はなかったのである。

戦時下、銃後国民生活の統制と家庭振興運動が展開した。運動の中心課題である「青少年体位向上」「国民の栄養」「消費節約」「資源愛護」「母性愛護」の問題は家庭科と深い関連がある。家庭科は、家事と裁縫を中心として音楽・習字・図画工作と一括されて芸能科に含まれた。

昭和19年発刊の「中等家事一」には、保育の領域として「四、弟妹の世話」がとり上げられている。国の宝として子どもの世話をするのは母のつとめである、とした上で、母を助ける姉としての立場で幼い子の世話について指導している。内容は、乳児の生活、守りの注意、よいしつけ、幼児の遊ばせ方である。

（2） 昭和22～25年度

昭和22年新学制の発足とともに家庭科は「各個人をよき家族の一員、家庭の建設者とすること」を目標に新しい教科、職業（家庭）となった。中学校の目標7に「乳幼児の生活を理解し、やさしく世話することのできる能力」をあげ、乳幼児を対象とした保育に関する技術・技能の学習を通して、幼い家族に対する姉としての態度と責任及び保育の能力を養うこと目標とした。

当時は占領軍の指導下であり、指導項目として、公衆の面前で授乳する習慣を改めさせることがあげられ、文化の違いから生じた指導内容を含んでいる。戦前の教育内容と比較すると、母親

になるための準備教育から、乳幼児を理解して将来へつなげていく教育へと変化した。同時に教科書は育児書をそのまま転用したものから、子どもを理解するために生徒自身に考えさせる内容へと変化した。小学校の指導内容にも5学年の内容として、子守り(家庭における子どもの仕事)があり、小・中・高と一貫して保育の学習があり、実際に乳幼児に接する機会を多く持つようにしている。

(3) 昭和26～31年度

指導内容には変化はないが、表現の仕方に変化がみられた。保育は、第一節、仕事(衛生保育－保育－乳幼児のせわ)、第二節、技能(衛生保育)、第四節、家庭生活・職業生活についての社会的、経済的な知識・理解(家庭と保育)の中で扱われた。内容は乳幼児の世話の実際、家庭生活の中における保育の重要性、乳幼児に関する社会施設である。家庭の中だけでなく、社会の中で子どもを守るという新しい視点が加わった。

(4) 昭和32～36年度

家庭生活における基礎的な技術の習得、基本的な活動の経験とともに、国民生活に対する一般的理解を養うことが目標となった。第5群(食物・被服・住居・家族・家庭経営)の家族の中に保育、家族、家庭看護がとり入れられている。内容には変化はないが、乳幼児の世話、扱い方、病気、看護、育児法の改善、環境、児童福祉の項目に整理され、青年の発達に関心をもたせる項目と母性に関する項目が加えられ、将来の保育者として自己にかかわる課題の学習をとりあげた。

(5) 昭和37～46年度

昭和33年、教科の再編成がおこなわれ、職業・家庭科は解体され、技術・家庭科が設置された。職業・家庭科における男女共通学習は廃止され、学習内容は男子向き、女子向きに分け、女子には被服製作、調理、保育と工業及び工作の一部を学習させることになった。保育では乳幼児に関する知識は高等学校段階へ移行し、幼児の心身発達と生活を理解させるための手段として、幼児の衣食住にかかわる物をつくる、という家庭生活技術の修得が学習の中心になった。

(6) 昭和47～55年度

昭和30年代後半の産業や科学技術の急速や中学校教育の実態などから改訂が行われた。目標は、より生活的で、工夫創造の能力についてもより生活に密着して育成するように考えられている。内容は男子向き、女子向きに分けられているのは同様であるが、女子向きの領域は被服、食物、住居、家庭機械、家庭電気及び保育とし生活的分類となった。

保育では、目標の(2)に幼児向きと考人向きの献立て作成、調理、栄養があげられている。

(7) 昭和56～平成4年度

大きな変化は、男子向き、女子向き分類から、技術系列・家庭系列分類への変更である。男女はそれぞれの系列の学習をおこなうとともに、相互乗入れ学習をおこない、ある程度の制約は受けるが、学習に巾が出た。また、それまでの技術一辺倒から、生活に豊かさをもたせる目標へと変わった。

保育では、幼児の心身の発達、遊び、被服、食物に関する項目及び生活習慣についてとりあげ

ている。新しい項目として、家族関係、家庭生活及び社会環境と人間の発達過程との関連を理解させるものが加えられた。生活に必要な技術、という見方には変わりはないが、将来に役立つというよりはむしろ、現在の生徒の人間形成上適切であることを重視している。幼児期の環境、養育方法、両親を含む周囲の人々や社会の在り方が子どもの成長、発達に影響を及ぼすことを知ることによって自己理解につながるようにしている。また、幼児に対する理解や関心を深めるために、遊具、遊び着、おやつ製作をとり上げている。

(8) 平成5年度～

昭和62年、教育課程審議会の「幼稚園・小学校・中学校及び高等学校の教育課程の基準について」の答申の趣旨を受けて改訂がおこなわれた。「21世紀に向かって、国際社会に生きる日本人を育成する」という観点に立ち、社会の変化に伴う生徒の生活や意識の変容への配慮のもとに目標がたてられた。特に家庭科については、環境や社会の変化等に対応し、男女が協力して家庭生活を築いていくことや生活に必要な知識と技術を習得させることなどの観点から、内容・履修の改善と実践的・体験的学習の充実が図られている。社会の変化から「情報基礎」「家庭生活」の領域を新設し、「木材加工」「電気」「機械」「栽培」「食物」「被服」「住居」「保育」を加えた11領域となった。11領域の中から7領域以上を履修させることとし、「木材加工」「電気」「家庭生活」「食物」は、生活環境や家庭の機能の変化等に対応するためすべての生徒に必修となった。また、従来の指導要領にあった題材の選び方、学習指導上の留意点の記述はなくなり簡潔にまとめられている。目標の解釈、指導内容について、教師の意志、判断、力量にまかされる部分が多くなった。

保育では目標に関してほとんど変化はないが、内容構成に多少違いがみられる。内容は、(1)幼児の心身の発達(昭和56年と同じ)(2)幼児の生活(2)(3)にあたる(3)幼児の発達と環境(4)である。

「幼児の生活」では、「ここでは、遊びを中心とした生活、食生活、衣生活の特徴について理解させる。また、幼児期は人間形成の基礎をつくる大切な時期であることを知らせ、幼児の発達段階に応じて芽生えるいろいろな能力や自主性をとらえて生活習慣を身に付けさせることの大切さを考える。」とあるように、幼児の生活を全体的にとらえようとする方向付けが行われている。食生活については、「幼児向きの一日の献立で作成、間食作り、食事に関する生活習慣」から「幼児期の栄養の特徴、間食作り、食事に関する生活習慣」へと具体的なものから抽象的なものへと変化した。衣生活は表現上は変化しているが、内容は「幼児に適した衣服の選び方、簡単な製作、生活習慣」で変化はない。「幼児の発達と環境」では、社会現象と幼児の発達の関係、児童福祉の記述がなくなり、保育所や幼稚園における幼児同志の関わりの中で幼児の人間形成が行われることの記述が加わった。ここでは、抽象的、包括的な記述から具体的記述へと変化している。共働き家庭の増加による集団保育参加が早まっている傾向や、小家族化、出生児数の減少によって家庭保育だけでは、同年令の子どもの接触の機会が減少していることなど、現状に即した記述になっている。56年度の指導要領にあった学習指導上の留意事項、保育学習の意義、視聴覚材料の活用についての部分が削除されている。

(2)生徒に学習の必要性を認識させるために「保育」を学ぶことは、将来の生活を想定してそれに必要な知識を得るといふより、現在の自分を高め成長させるものであるということ気付かせるようにする。「保育」の学習を通して、生命の尊さや人間の可能性、親子のかかわり

などを知り、両親への感謝や家庭の意義やあり方を考えさせ将来の生活に向かって意欲をもたせるように配慮する。

(4)身近に幼児のいる生徒が少ない現状を考慮して、できるだけ幼児との触れあいをもたせるため、観察・調査・見学などの機会を設けたり、視聴覚教材の利用、実物標本などを活用して学習効果を高めるように配慮する⁶⁾。

特に保育の意義に当たる(2)の削除は、保育のこれからのあり方の共通理解にかかわる部分であり、非常に残念である。

4. おわりに

中学生、教師、大学生を対象とした調査から、保育に対する考え方に教える側と教えられる側に大きなへだたりがあることがわかった。生徒にとって保育領域は、技術・家庭科の中では興味の低い領域である。大学生の調査からみても、中学時代の印象はうすい。しかし、教師は保育領域を「人間について考えさせる領域」と考えている。授業を通して生徒に「現在までの自分をふりかえさせ、自己理解を深め、親に対する感謝の気持、人への思いやりの気持ちを起こさせ、これからの生き方」を考えさせようとしているが、生徒自身は子どもから大人への過渡期にあり、「人間」よりも自分自身への関心の方が高く、教師の考え方は伝わっていない。保育と一言でいっても内容は多く、時間数は少ないため、授業は理論的表面的になり、全体を網羅しようとする知識の羅列にとどまり、また、生徒の現在おかけしている環境から考えても授業内容は身近でなく、学習の効果はあまり期待できない。多く扱われる題材として、おやつ作り、おもちゃ作りがあるが、生徒の興味関心はひきやすいが本人レベルにとどまり、幼児理解や人間理解には到達していない。

時代の変化によって保育学習の内容は、母親準備教育——乳幼児を直接対象として自己の態度と責任及び保育能力を養う——具体的なものから、幼児理解——食物・被服などの実習を通して間接的に幼児を知り、一般的な知識を得る——抽象的なものへと変化してきた。結婚年齢の上昇により、中学校卒業後、すぐに育児を行う人はほとんどなくなり、きょうだい数の減少、出生児数の減少、近隣との接触機会の減少などにより幼児との接触することもなくなり、知識や技術の活用場もなくなってきた。

教師の意見、そして現状を考えれば、『保育＝家庭における子育て』という考えを変更し、保育の範囲を広げて行くことが必要ではないだろうか。今後は、この領域では自分をふりかえるとともに他人についても考えることのできる人間を育て、さらに、人間の尊厳や生命の尊重について学習を行う必要がある。対象を幼児と限らず、人間に広げることによって生徒の興味、関心を持たせることになり、男子生徒にとっても身近な問題としてとらえることが可能になる。しかし、そのためには内容、教材の選択など検討すべき問題はたくさんある。「人間観を育てる教育」とするならば、断片的な知識を与える教育ではなく、小・中・高と系統だった学習体系を考え、段階的に実習を組み込んだ教育をすることが必要である。

本稿を終わるにあたって、調査に協力して下さった盛岡市立上田中学校、伊瀬谷ひろみ先生、

3年生の生徒の皆様，盛岡市付近の技術・家庭科担当の先生方，岩手大学教育学部家政科学生の皆様に感謝いたします。

- 1) 盛岡市立上田中学校 技術・家庭科『生徒は今……子ども白書』（平成元年度）
- 2) 前掲1)
- 3) 文部省『中学校指導書 技術・家庭編』（開隆堂出版株式会社，昭和53年5月）123頁
- 4) 「保育学習をする中学生たち おにいちゃんかいじゅうよりおおきいね」（『母の友』第455巻）43～50頁
- 5) 小嶋秀夫 『子育ての伝統を訪ねて』（新曜社，1989年10月）230～235頁
- 6) 前掲3）130頁